



渡鳥集夜卷

八長崎記

落去來

錦をまきて衣のよめる人ハきこめ也
及へき墨衣乃短き草鞋をきき
えきしめ頸地修りしそ父祖の墓
の塵うちをひき除きてひらけそん
さまハさすうよそりしきすしそん
身しそ長途に垢衣ある衣装の
より腰刀よそそあめつけといふ物

三版乃石壇二陣の華表昔見し
光るやまきれを

當とさう成京てかへ海も旅路此
葉乃松北表ハ天満宮をめぐりて
里ぬ磯子天とくも山あふあぬハ
ト也あといとまうらすとちあぬ人
とくそ崇あまふとらあぬあ一日足乃
峰ハさのあ跡のあしあふ埋まを
都のさいとさき一陣とくあぬあ

とよ帆まけ山ハるゆらんあああ
受宕といふ名此意しくあぬいんとく
坂ハ田ああああひて肥後さつあの旅
人をすむ小嶋大浦ハ殊の字とあ
らあ川りさ梅うあ此自ひすれハあ
山乃山陰子遊女此一里ハささむらん
すあそ家富郷葉ハ所を内あふ
く被亦あ此人を任あむれハさくの教さ
多くああ此益あふあああ

燈籠此火點ハ去冬ハし人ニシテ
驚くも有り也

兄一人も孫子も有りて差支

見たりや等々一ツけ旅日のまゝ
うちへ一ツは毎月もそれんと
かゝり住居へきおむひまを
い川立出んやも去々種福
法おほつうなきらん
情りな海

旅心も今ハ何や寝也旅里智

初うき不のう夜乃明る月外七

大本此板木一本もつきて同

かかれまうひとなき内方之去来

お若也成は年ハいつも昼さる同

うちわあせよ海音お此空外七

ういより類腫物乃をわりせ同

それとよ人が意をして飛ぶ来

祭五月ハ次月よを消よ七

京へくや時香 飛来
百牧の拾も中りくおまひ原七
年ハ十六智恵ハ六牛来
おろ此子代お者えうちそりひ七
まはらうふけき海庚申のよき来
石部まを通一乃び名籍をい山若七
水食くもまところ中一呼一 来
大分お今日此花見此山極引七
東風 空子 ぬて 暖いあふない 来

こうくと狐鳴り春の衆同
辰戌もろろり一 足て野香院七
あつらうき草履草跡腰よつけ来
ふしうととろく名月のあ七
女房丸此物てしあき一去年の秋来
稲と木綿とをいさ宮中一七
うき量重るる八歳とふりうら来
山伏ひとりくれよ 失くたり七
さぬ馬とく荷持とつきて楯のえ来

茶乃たもこ此といふて 幼茶七
世の間ハ氣勢々々を定すすす末
也川をり 元乃こめらあひひ七
鴨川や吉田 白川 志々々谷曰
比敵の根 鹿 吹くをり 川末
目振まよ今日ハ朔日 神皇月七
取也しん 元乃お乃古びは末
田舎老 娘をさるる 花の陰同
す流のたのみ乃つし 小童七

元禄十一の秋七月九月長崎よ
いふ千里亭よ宿す けまハ
浴乃を末よゆりせしれて
文通の風雅ハ眼をさるし
長崎よ卯七持言とあひ
いしせしる男也 予け地
末言酒ハあそそす者も
ほろしす 門下の風流ハ

海子諺らん

支考

錦襖は純子もいとす月よ
破まを浪乃音をうり 秋郊七
唐秦北種つらもよく吹あけて 素行

素行亭興行

支考

三味線は秋まことありし 原と舟
西風く乃の橋乃夕月 素行
よい宿たさくせへ度 萩咲て 郊七

むすこのお茶肝北つらも 素行
昼食ハちて 喰山とる 呼文 素民
ありありれハちと月もあり 風叩
肥後米ハ石て八十之を先放
夕ア北塔ハ面白 不ん考
俳諧て隠居北伝年き 行
柿ヨ 葡萄 菊ヨ 秋ハ 素行
こころせ八月ハ法輪 漢紙の香末
うとせめりて 跡ハ 志ら 素民

孫八は夢け不縁ふも息なり
とくく教ありと想ふ出来お放
想くく水邊おくみよおりゆそ筆
河原をさけれあまう春に常行
鴨も鳩も夜よまら教の左れ考
春のふふれ夜安鞠けら末
とふれ子れ取よま言離籠り七
うそ八百り一 吐す商人叩
幸とおぬくいさく看さるり民

板の木よ陰る 門乃ほしお考
おらるるいふせそかのよ語さし故
鐘木れ恋をえあふそやも七
杉坂もここのぬ躍の汗くさき行
うらなほらりよ春に石の月民
白雲北よ吹雪しよる浦の浪来
愛宕北坊そちよと 盃放
風りと何やうゆき旅 比叡叩
あまのよ 草のとれるよみ流行

んぐりと西ひらけう 窓吹り 考
あまほつこりとあまぬ 二月末
西照つらんよとよ 地主の毛七
うまうりまをれ 去る うらうら
うちつさ 治る 世ふをめしとけき 民
こころとて 丁と も百よなる 放

各五目 筆

元禄八年の秋西海の覇旅

おもひ三月よ吟し 重子賦呈
て九月一日 崎江十里亭よ詠
つそとら

惟然

胡亭北海山之畔む 泉居り
このあらし 雫の 鶴うら 出ず 卯七

素あり亭

素来

浦人残夜 昔 海 名 月 去
後 里 休 舟 下 居 静 一 也 素 行

送去東飯京

卯七

はこら北之河のへよ後鳥
芦河の月の先きこ川 旅去東

送卯七飯國

酒堂

枝くよふるも秋也唐りりし
茶鉢代志めす 椽先の飯外せ

敷照院ハ晴陽の辰とよる
入江こころとよより小嶋山向
よ横こふ吹交支考

蒼麥よまよと漆りりらん山島
と夢へしハ秋の比ふ事先
こま此らみ妹情まんと人
く日流まを

去来

山畑の青み跡と冬梅
胡糸 寒う 村 雀 啼 素民

そらつくくと驚き筑北の道とみ出でて先放
酒よ志さう海 鰻 頭 の 代 業 行
此部一尾よ六四季成うの七日の影風叩
首ほと ひう海 隈 篠 の 影 夕 七
あひりくめがと 男 席 の つれ 返 る 氏
墨の結ももどが 志 う 世 末
まひくよみ北あま 北 ね と ま 支 行
室北入くく ひさや 花よ 故
南年も 鯨 中 官 北 ぞ つくと 七

二介がいれて 中介うなる 叩
まを多分車くくき 鳴の帯末
松坂よりハいせし 日たより 民
友切北帯をとるともす 朝の月 故
竹乃葉あしよ 也 祓うす 之 行
花のちる比ハ 夜 登 音 吹く 叩
花北 名 北 と 京よ 道 百七
一折出まぬれハ 物う ち 喰ひ
咄 志こころそあつけんとも

謂す例の卯七火燧の方位
を分ちて又頭を撰らしむ
それ争ふは此所法にらむ
先放ちあつてはこゝろおち
櫓の上は賦を撰らるるを
傍り自と別各々を撰ら賦ス

東

風印

折ぬと所強地よむらふ火燧也

西

卯七

火燧にて煉好のふはは座らや

南

去来

去夜すや火燧際と月のうけ

北

素行

此方ハ火燧と客一 言おわし

上

小僧

描出して火燧のふれうきりけ

中

素民

是あつた火燧をいつてもはつて

角

先放

昔りゆんで元を也火燵の人此君

比浦よ先生師の石碑立ありん

そ更もとあまゆりうあゆ

山歌なりやすすらひて

卯七

粗摺也日なうううあふふ六月

うき福とせし海冬よの 岩野坡

元禄壬午の歳都よのほり

落柿舎よ舎す

先放

多中よ教よあれてや村よあ

海とよさこゆるこらううの月吉来

膝血のひゆる机を押しあうて支考

おとこ世帯のいま時言をすら放

松乃をとりく坂のありよ老来

合羽をぬすしうりたり考

状第り一葉簪一荷此爪のと放

あまののむら、よつて法のことより来
るまののむら、屏風引廻し考
をまの目と此をよつてけけ放
唐系此のむら、六月此茶をこれて来
あまのむらよとよつて、及て猫考
白壁の目よつて、畧乃書 所放
錢一みの念佛、先師の捨言とよつて来
寺のよつて、き木履投まらり考
日よつてのそく、市に賣物放

け神の衣文、名をき、歳の名を来
言此果とや、村よつて、あく考
穀入乃よつて、連し、左に放
芝居乃れり、志つと名が、来
而此此ほら、よつて、たると、考
見よつて、帯よ、志、いん、一、考
君、か、の、我、ハ、清、十、神、の、来
その餅、つきの、あつ、つ、考
鶏、ハ、あ、く、考、あ、よ、い、考、明、し、放

いひても風乃あまの白須賀来
浪人を面白くもうなのおのうの考
草名月をとり饅頭故
あのをとく萩の病と嘆くれ来
惟喬をうりうらめし此殊考
ふよんで顔とくほと紙に合する放
夜ハほのくくと子縁吉のう来
咲神の花よりみおれ梅のう考
下白のらちをいそ苗代放

日中よまき雀のあまをうらめし
けのとけさい京も田舎も考

風叩くまはるる色をんともみ

きーあけらりーあやきま

雪の人は去れらる梅の詩
柳をえらよこちハ蝶地風叩
をうらめし一をすれハ春めきて素民
さよこれ頭痛を遠とて守る外也

うすくともあま出て居る三日の月 素行
蒼蒼北にれ笑 留の白妙 先放
歌よこれ以方のいふの妹来て叩
折こえゆる 室乃 家申花来
から流も足があらうを 邪魔 孕七
あやののくせよせい斗の川 民
さるもの形まつけても物事ひ放
むくくく さんちやう 京行
あ風 孕子二人つ入 組あをせ来

くくくまにあらる車戸此音叩
つうえは海重紙風の吹やうて 民
松のあらう紙通る 公家 亮七
月むりかやまの用意の板ひさし 行
とらたらうやう 忘れぬ出替 放
期起ておれう教書よふいのほり 叩
堤の上のひろき芝をう 来
占の着板出して 枝折垣七
木をうりハいとくうく 民

てんろろろ後いふひの種とあり
放ちていんさう河津の浪風行
電の光つめ海園乃ろち来
薄よとあゝ入ろこの月叩
寒うねる秋をよいふよい花之民
一膳あゝ暮暮のあゝあき七
ふまえ物せよいとらぬ概の上行
豆うけ音のともあゝ節を放
浮せろ鳥乃房も日枝の山叩

ちと子外て面白いら来
孫とも乃孫仕よ娘の取は七
又灯籠を節遠よ墨氏
降ろろろやろ降まよと音の花放
旅乃ろろも浦山の表は

送怒風取國

卯七

花多枝い津のちれあゝ甚
羽織をすろも春の胸中怒風

先放り野

去来

朝く乃葉の御さや 杜より
空らんありと 夜ハ暮るなり 先放
小包子皆飛来乃 支波しそ 風叩
在波の伴ハ 吸拍のらん 素民
月けは砂のひつく 小ハツ時 卯七
うやく いふて 唇の 遠寄 依 素行

元禄此を一の都子のほろ

落柿舎紙抄ひて

卯七

京入や 多羽此 田植此 海ら中
うまーとつむ 柳菰子 十ヶ 去来
さハ里ハ海ハ 賜此 物成いそ 去来 同
音立のほろ 庄此 極先七
胡月子 鐘ふると ともお 也 同
瘦ハ 海 咽を さすらる や 室を 大州
うき恋子 じりこ ちんあす 原の上 同

12
室は遊女此年しし減ん末
をらんと湯及此内河吹風七
奥は子よハ燈籠とほりり州
立向成敗しししし荷ひ出し末
弊しよさるる片頬此腫七
ソ花笑や跡四角な海大屋安州
種敷おらすよ此老山りさ末
おりらういも背の雜談州

戸障子の繪もすさ成煉の月来
あけき蓑を版巻のうへ七
くさき此志洞さひてあふ道
鶴ゆい乃桶持てまつ同

